

ブルーノ・タウトとベルリンの住環境

——一九二〇年代後半のジードルンク建設を中心に——

北 村 昌 史

【要約】ドイツの建築家ブルーノ・タウトは、一九二〇年代後半のベルリンにおいて広範な社会層のための住宅建設に大々的に関与する。当時ベルリンでは公的な援助のもと非営利的住宅建設団体が積極的に住宅建設を進めていた。タウトが設計した「ジードルンク」だけでも、そこにもうけられた住居は一万二千におよぶ。タウト研究は近年盛り上がりを見せているが、そうした研究では彼の活動と、一九世紀の都市化によるベルリンの変化を関連づける視点は希薄である。本稿は、一九世紀前半以来のベルリンの住環境の変化とそれに対応すべく展開した住宅改革運動の系譜の中にタウトのジードルンクを位置づけることを目的とする。そのためまず一九世紀の住環境と住宅改革運動を概観するが、その際注目するのは一八六二年の「ホーブレヒト案」によって生み出されたベルリンの都市構造である。この都市構造を念頭に置きタウトのジードルンクの評価を試みたい。

史林 九二卷一号 二〇〇九年一月

はじめに

ドイツの建築家ブルーノ・タウト（一八八〇—一九三六年）が、一九三三年五月から三六年一〇月までの三年数ヶ月の日本滞在の間、建築家として残した仕事は皆無に近い^①。桂離宮などの日本の伝統的美を独自の観点で描いた著作は、その後^②の日本の読書人や建築家に大きな影響を与えたものの、彼が日本で設計し、実現した建築物は熱海にある日向邸のみとい

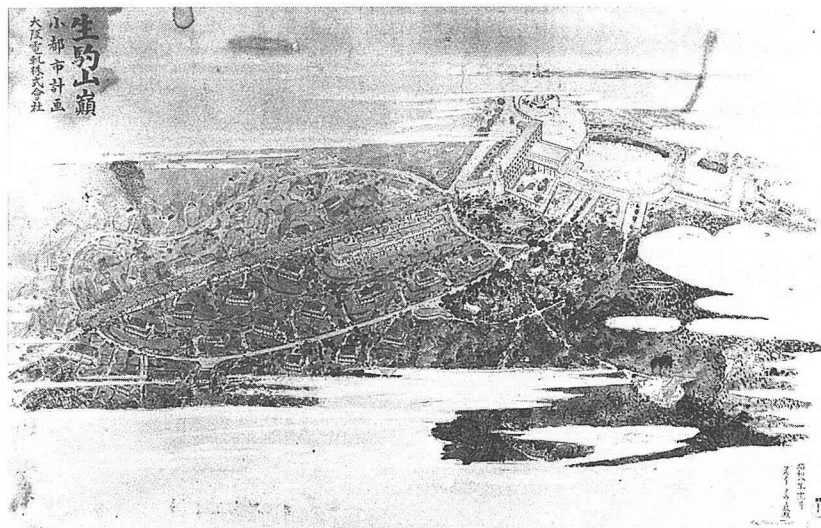


図1 生駒山嶺小都市計画実体図（大和文庫蔵）

える。とはいえ、構想したもの、実現しなかったいくつかの計画^③があり、日本滞在中の建築家としての彼の思念を辿るにはそうした計画の検討も欠かせないであろう。そうした実現しなかった計画の中に、彼が大阪電気軌道株式会社（現在の近畿日本鉄道）から依頼されて一九三三年に作成した「生駒山嶺小都市計画」がある^④。この「小都市計画」は、既に開園していた遊園地と敷地を接するかたちで構想されている。そこに現在も生駒山のランドマークとなっている飛行塔と、それに隣接して建てるのが計画されたホテルを中核にして一戸建ての住宅が配置されている。この一戸建てが予定されていた区画には現在テレビ局のアンテナが林立している（図二）。

実現しなかったものの、この計画は、以前の活動との連続性のもと日本におけるタウトの仕事を理解するために重要な業績といえる。まず、本稿でもみていくように、こうした多くの住宅を集めた居住地の建築は、ドイツにおけるタウトの活動領域の中で大きな比重を占めるからである。彼のそうした活動は、第一次世界大戦前のベルリン郊外の田園都市フアルケンベルク建設にはじまり、一九二〇年代後半のベルリンのジードルンク建設で頂点に達する^⑤。彼は、公益的住宅・貯蓄・建築株式会社

Gemeinnützige Heimstätten-und Sparaktiengesellschaft が建設したジードルンクを中心に、一万二千戸の住居の設計に関与したのである。^⑥ この会社は略称を GEHAG といい、本稿でも以下この略称を用いる。「ジードルンク Siedlung」とはもともと開拓地を意味する言葉であるが、ヴァイマル期のドイツにおいて新しい発想に基づく集合住宅や住宅地を表す概念として用いられるようになっていく。^⑦ 次に、人里離れた山中にモニュメント的建造物やそれを中核にした共同体を設けるという発想は、第一次世界大戦中の『都市の冠』や『アルプス建築』などの彼のユートピア的著作^⑧の具体化と解釈できるからである。

タウトの建築家としての活動領域は以上にとどまらない。家具を設計したり、人の動線を合理的に考慮した部屋と家具の配置を考案したりしている。^⑨ 彼の活動は、現代的な住居の成立に関わる点について極めて広範囲にわたる。これに加え、ケーニヒスベルクに生まれ、教育を受け、ベルリンで開業し、その後マクデブルク、再びベルリン、モスクワ、日本、そして客死したトルコと活動の場を大きく変えた彼は、それに伴い建築上の表現形式を微妙に変化させていく。^⑩ こうしたタウトに対する歴史的評価を総体的におこなうのは、実は容易な作業ではない。本稿では、タウトの全体像を解明するのは今後の課題として、とくに一九二〇年代後半のジードルンク建設に焦点をあて、彼の住宅建設をベルリンにおける一九世紀中葉以来の住環境の変化や住宅改革運動の展開のなかに位置づけることにしたい。

これに加え、「おわりに」において、本論の議論を踏まえて戦後ドイツにおけるタウト評価とドイツ・ベルリン社会の変化の関係について簡単に検討を加える。したがって、本稿は、一九世紀ベルリンの住環境や住宅改革運動を、タウトという媒介項を通して現代社会まで見通しをつける試みといえる。このように本稿は二百年近いきわめて長いタイムスパンを扱うことになるが、その間ヨーロッパにおける住環境は大きな変化を遂げている。一九世紀の都市化の過程の中、上下水道、ガス、電気、公共交通機関などの「ライフライン」が都市社会に張り巡らされ、住環境のレベルを維持するためにこうした「ライフライン」の存在を抜きにしては考えられないようになる。住環境が、住宅内に水、暖房や調理用の燃

料、灯火用の油をもつてくるにも、排泄物を処理するにも自力でおこなっていたものから、そうした作業を他人の手を借りてやらなければならないものに変化したのである。本稿は、こうした住環境の変化の過程を、主に住環境を改革しようとした人々の議論から辿ろうとしたものである。^①都市問題や住宅問題も、人間が取り組んできた重要な「環境」であろう。筆者が年来研究を進めてきた住宅改革運動も、そうした「環境」に対する働きかけの一つなのである。筆者の研究はその働きかけを具体的な歴史的脈絡の中でとらえようとしたものであった。^②本稿は、一九世紀の「環境」について検討してきた筆者の研究成果をより長期的なパースペクティヴの中で位置づけようとしたものといえる。

それでは、章を改めて本稿の議論に関わる研究動向を整理して課題を明確にしたい。

① タウトの日本滞在中の活動については、土肥美夫『タウト 芸術の旅——アルプス建築への道』岩波書店、一九八六年、二三〇—二三九頁、セゾン美術館編『ブルーノ・タウト 一八八〇—一九三八』トレヴィル、一九九四年、二五九—二六六頁、ワタリウム美術館編『ブルーノ・タウト——桂離宮とユートピア建築』ワタリウム美術館、二〇〇七年、一一三—一七四頁、Manfred Speidel, Bruno Taut in Japan, in: Winfried Nerdinger und Kristiana Hartmann, Matthias Schiren, Manfred Speidel(ed.), *Bruno Taut, 1880-1988 : Architekt zwischen Tradition und Avantgarde*, Stuttgart/München 2001.

② ブルーノ・タウト『日本美の再発見』岩波新書、一九三九年、同『ニッポン』（森偶郎訳）講談社学術文庫、一九九一年（初版は一九四一年）、同『日本文化私観』（森偶郎訳）講談社学術文庫、一九九二年（初版一九三六年）、同『画帖桂離宮』（篠田英雄訳）岩波書店、一九八一年。日本滞在中のタウトの日記も翻訳されている。ブルーノ・タウト『日本 タウトの日記』（篠田英雄訳）岩波書店、一九七五年（一九五〇年に五巻本で発行されていたものを三冊に再編集したもの）。

③。

③ Nerdinger et al. (eds.), *op.cit.* p.310-385 にタウトの建築作品を年代順に並べたリストがあるが、日本滞在中の作品は p.386-389 に生駒山上小都市計画、東京のトルコ大使館、日向邸、東京郊外の一住宅試案、麻布の大倉邸（一部のみ）があがるのみである。

④ タウトの描いた生駒山上小都市計画の各種の図面を発掘し展示したのが、一九九四年のブルーノ・タウト展であり、それらはその図録であるセゾン美術館前掲書、二三二—二三五頁に掲載。二〇〇七年のタウト展の図録であるワタリウム美術館前掲書、一三四—一三五頁にも収録。ただし、これらの図録では図版の紹介にとどまり、管見の限りでは、生駒山上小都市計画に関する研究は今のところない。

⑤ タウトのジードルンク建設の概略については Kristiana Hartmann, Bruno Taut, der Architekt und Planer von Gartenstädten und Siedlungen, in: Nerdinger et al. (eds.), *op.cit.* 参照。

⑥ GEHAGの活動の概略については、ベルリンおよびその周辺の公益的住宅建設組織の「社史」である *Geschichte der gemeinnützigen*

Wohnungswirtschaft in Berlin, Berlin 1957, p.213f. 参照。

⑦ 日本滞在中に執筆された「ジードルンク」についてのタウトによる、簡単な考察として「ジードルンク覚書」および「日本とジードルンク」続編、建築とは何か」鹿島出版会、一九七八年がある。

⑧ この時期のユートピア的著作については Iain Boyd Whyte, *Der Visionär Bruno Taut*, in: Neding et al. (eds.), *op.cit.* 参照。ワタリウム美術館編前掲書 四〇—九三頁も参照。「アルプス建築」の原文に *in* Bruno Taut, *Alpine Architektur. Eine Utopie = A utopia*, München: Prestel, 2004 を参照した。

⑨ この点を理論的に考察したのがブルノ・タウト『新しい住居——つくり手としての女性』（斉藤理訳）中央公論美術出版、二〇〇四年（原著は一九二四年）である。それをベルリン郊外ダーレヴィッツの自宅において実践した状況をのべたのが同「一住宅」（斉藤理訳）中

一 問題の所在

第二次世界大戦後、ドイツ本国において建築家としてのタウトについては、建築界においても歴史学界においても関心が向けられてこなかったといえる。^①ところが、一九八〇年代以降、ドイツ本国でもタウトの活動を包括的にとらえようとする研究が進みつつあり、^②彼に関する研究は汗牛充棟の観がある。^③建築史家ではない筆者は、こうした彼に対する関心の変遷の背景を十分に論ずる資格はないが、社会史的な背景については「おわりに」で改めて議論する予定である。

日本においても、日本滞在期の彼の活動にもっぱら焦点をあてた、かつての研究状況は、現在では完全に乗り越えられている。その点で先鞭をつけたのは、一九八六年の美術史家土肥美夫氏による著作である。^④土肥氏は、同時東西ドイツでみられるようになったタウト再評価の動きを取り入れつつ、ドイツにおけるタウトの活動の史料調査もふまえながら、

中央公論美術出版、二〇〇四年（原著は一九二七年）である。

⑩ タウトの経歴については Neding et al. (eds.), *op.cit.* p.208f. の *Biographie* やセゾン美術館編とワタリウム美術館編の図録参照。

⑪ ドイツにおける環境史研究の動向については田北廣道「ドイツ学界における環境史研究の現状——エネルギー問題への接近方法を求めて」『経済学研究』六七—三、二〇〇〇年参照。日本においてドイツにおける「環境」を扱った先駆的な研究として、我々が目にする森林も人間の手が入ってからはじめて成り立っていることを説いた、北村昌美『森林と文化——シュヴァルツヴァルトの四季』東洋経済新報社、一九八一年がある。

⑫ 拙著『ドイツ住宅改革運動——一九世紀の都市化と市民社会』京都大学学術出版会、二〇〇七年。

日本での活動にとどまらないタウトの活動を明らかにしている。日本におけるタウトの活動にも造詣の深いアーヘン工科大学のシユパイデル教授^⑥も関与して一九九四年と二〇〇七年の二度にわたりブルーノ・タウト展が開催され、タウトの活動をその初期段階から最期に至るまでを一貫してとらえるための土台が現在構築されつつあるのである。

とはいえ、建築史や建築研究の観点に立つ近年の研究では、タウトの建築活動やその背景にある理念を検討していても、彼の活動を一九世紀以来の都市化に伴う住環境の変化のなかに位置づける視点は希薄であることはここで強調しておきたい^⑧。タウトの活動については、前の時代に対する革新的な側面のみならず、本稿でも明らかにするように、一九世紀以来の連続性のなかで発想していると、とらえるべき側面もみられる。彼を包括的に理解するためには、彼が伝統からうけられていた側面も議論に取り入れる必要があるだろう。本稿では、生駒山上の住宅地にもつながっていくタウトの建築活動とくに二〇年代後半のジードルンク建設を一九世紀以来のベルリンの住環境の変化やそれを背景に展開した住宅改革運動の流れの中に位置づけたい。ただし、生駒山上の住宅地についてはエピソード的にふれるにとどめ、本稿の主たる舞台はベルリンである。

タウトの活動を一九世紀社会からの流れの中で位置づけるためには、一九世紀の住宅や住宅改革をめぐる研究動向にもふれる必要がある。一九七六年に公刊されたニートハンマーの論文^⑨を嚆矢とする一九世紀の住宅研究の動向については、以前検討したことがあり、詳細はそちらに譲りたい^⑩。

ここでは本稿の議論の研究史上の意義を理解するために次の点をのべておけば十分であろう。一九世紀ドイツの住環境や住宅改革運動を扱う一九八〇年代以来の研究は、第一次世界大戦後に基盤が確立する「社会的住宅建設（sozialer Wohnungsbau）」を一つの到達点として一九世紀中葉以来の運動を叙述する傾向にある。「社会的住宅建設」とは公権力の積極的な関与のもと住宅建設を進めるあり方をいう。こうした視角で研究が進められたために、本稿の関心からいえば次の二点の研究上の問題が生じている。第一に、一九世紀の住宅改革運動のうち「社会的住宅建設」に関わってくる部分だ

けに焦点があてられ、都市化に伴う住環境の変動との関連が十分に検討されてこなかった。第二に、「社会的住宅建設」誕生が決定的転換点と見なされるため、一九世紀中葉以来の住宅改革運動についての叙述が第一次世界大戦までとまっ
てしまい、ヴァイマル期の住宅建設との関わりが具体的に論じられない傾向がある。この点についてはヴァイマル期を扱
う研究も同様であり、第一次世界大戦前の状況については十分な考慮を払っていないようである。結果として、一九世紀
の状況とヴァイマル期の動きとの関連が具体的にとらえられているわけではないことが、近現代ドイツ住宅研究^⑬の研究上
の大きな問題であると指摘したい。

筆者は、この二つの問題のうち前者を意識して一九世紀ベルリンで展開した住宅改革運動の研究を進め、二〇〇七年に
一書を公刊した。その際、住宅改革運動を、ヴァイマル期の状況から過去遡及的にとらえず、一九世紀社会の脈絡のなか
でとらえることを試みた。本稿は、その成果に依拠しながら、後者の問題を考えるために筆者が最近研究に着手したタウ
トのジードルンクについて一つの解釈を加える試論である。タウト自身、第一次世界大戦以前に一九世紀以来の住宅改革
運動の流れをうけて活動を始め、大戦後その構想をさらに発展させる。タウトはこの問題を考えるための重要な手掛かり
となるはずである。

帝政とヴァイマル期の二つの時期の架橋を試みることは、史上初の総力戦である第一次世界大戦の社会史、政治史、そ
して経済史上の意義を再検討するという課題にもつながる。大戦がヨーロッパ社会のどの部分を変え、そして大戦にもか
かわらずどのような要因が連続したのかという課題に現在関心が向けられているといえる。^⑭ タウトを手がかりとして本稿
はこの問題にもささやかな寄与をするはずである。

章を改めて一九世紀ベルリンの住環境と住宅改革についてみていこう。

① 一九八〇年代までのタウト研究の動向については土肥前掲書、七一
二三頁参照。

② タウト研究の転換をもたらしたのは Kurt Jungmann, Bruno Taut, 1880-1938, Berlin 1970 であり（筆者未見）、タウトに関する関心が

高まった時期にそうした動きを反映して世に問われた論文をいくつかまとめたのが土肥美夫他『ブルーノ・タウトと現代——「アルプス建築」から「桂離宮」へ』岩波書店、一九八一年である。

③ Nerdinger et al. (eds.), *op.cit.* p.416-433. 二〇〇〇年までに世に問われたタウト研究のリストが載っているが、それをみて一九八〇年代以降タウト研究が急増している様子がうかがえる。

④ たとえば、タウトに関する比較的新しい評伝である高橋英夫『ブルーノ・タウト』講談社学術文庫、一九九五年（初版は一九九一年）でも、焦点は日本滞在期のタウトである。

⑤ 土肥前掲書。

⑥ Speidel, *op.cit.*

⑦ それぞれの図録がゼンン美術館編前掲書とワタリウム美術館編前掲書である。

⑧ 管見の限りでは、F・ボレリ、K・ハルトマン「ブルーノ・タウト評伝——幻想的美学者から美的社会（理想）主義者へ」（生松敬三訳）土肥美夫他前掲書所収が、一九世紀以来の都市化の中でタウトを位置づけようとする例外的な研究であるが、概括的な状況説明にこだわっている。

⑨ Lutz Niehammer(unter Mitarbeit von Franz Brüggemeier) *Wie wohnten Arbeiter im Kaiserreich? in: Archiv für Sozialgeschichte*, 16, 1976.

二 一九世紀ベルリンの住環境と住宅改革運動

一九世紀になって進展した都市化に伴う人口増をきっかけとして、ドイツの市民層は都市の住環境の悪化を強く意識するようになる。それがドイツ帝国の範囲でもっとも顕著に現れたのが、プロイセンの、そして統一後はドイツ帝国の首都

⑩ 拙稿「一九世紀ドイツ住宅改革運動研究の動向」『西洋史学』二〇四、二〇〇二年および前掲拙著序章第三節。

⑪ 代表的なものとして Clemens Zimmermann, *Von der Wohnungsfrage zur Wohnungspolitik. Die Reformbewegung in Deutschland 1845-1914*, Göttingen 1991 などがある。

⑫ 近年の研究として Rudolf Baade, *Kapital und Wohnungsbau in Berlin 1924 bis 1940. Die öffentliche Förderung in der Weimarer Republik und im NS-Staat*, Berlin 2004 がある。

⑬ 次の二つの邦語文献は住宅をめぐる一九世紀の問題とヴァイマルの問題の関連を実証的にとらえており、両時代の研究の架橋という課題に手掛かりを与えてくれている。後藤俊明「ドイツ住宅問題の政治社会史——ヴァイマル社会国家と中間層」未來社、一九九九年、大場茂明「近代ドイツの市街地形成——公的介入の生成と展開」ミネルヴァ書房、二〇〇三年。

⑭ 第一次世界大戦とその問題については Roger Chickering, *Imperial Germany and the Great War, 1914-1918*, Cambridge University Press 1998, R. J. W. Evans and Hartmut Pogge von Strandmann (ed.), *The Coming of the First World War*, Oxford University Press, 1990, 松家仁「統制経済と食糧問題——第一次大戦期におけるボズナン市食糧政策」成文社、二〇〇一年、木村靖二「二つの世界大戦」山川出版社、一九九六年。

となったベルリンである。^①ベルリンの人口は、一九世紀初頭の二〇万人弱から世紀中葉には四〇万人、ドイツ統一の一八七一年には八〇万になる。その後人口の増加は加速化し、一九一二年には二〇九万人と第一次世界大戦前の頂点に達している。^②

人口増加は、必然的に住宅需要の増加をもたらす。郊外に一戸建てやそれに類似した形態の住宅を建設し平面的に都市空間を広げていったイングラント^③に対して、ドイツでは集合住宅を巨大化させることで住宅需要の増大に対応した。

早くも一八二〇年代には四〇〇世帯、二千人の人が住む、当時にあつては巨大な労働者のための集合住宅群が出現している。^④ベルリン市民からファミリーエンホイザーと呼ばれたこの建物の孕む衛生や防犯上の問題のみならず、市内に散在する半地下住居や屋根裏部屋といった住宅として不適切な部屋が住居として利用されているという状況が、市民層にとって問題あるものと捉えられる。住居そのものの劣悪さのみならず、住居が仕事場として用いられ、又貸しによって複数の家族が一つの住居に住むといった状況も市民層に問題視されていた。^⑤

こうした認識をもとに一八四七年にドイツ最初の住宅改革組織としてベルリン共同建築協会が設立された。もともと、この団体は、運営上の不手際のため、労働者に住宅を所有させることによって住宅問題の解決を目指す組織から、この団体が既に建ててしまった住宅を管理するための組織へと急速にその性格を変化させてしまう。^⑥

一九世紀中葉の住宅改革を巡る議論を見ると、改革住宅を介して市民的生活様式を享受する社会層を拡大することが意図され、都市の外に問題の解決を求めたり、都市社会全体を把握して改革をおこなったりするような発想は住宅改革に関心をもつ人の構想にはない。こうした当時の改革構想の象徴的な発想が、市民と労働者が同じ建物に住み、前者のよい影響を後者に与えるというもの（以下「混合居住」）であらう。^⑦

タウンの活動との関わりでベルリンの住環境をとらえる際に重要な転換点となるのは一八六〇年代である。一八六二年、ベルリン警視庁が、それまでの四キロ四方の都市空間が飽和したのに伴い、周辺部の道路網を策定するために「ベルリン

周辺部の拡張計画」を公布している。これは実質的な制作者J・ホープレヒトの名前をとって「ホープレヒト案」と呼ばれており、本稿でもその通称を用いることにする（図二参照^⑧）。

住環境ということでは、この「ホープレヒト案」の策定された地域で賃貸兵舎とよばれる集合住宅が乱立するようになったことをここでのべおきたい。それまでの建物が道路に面した部分だけに構造物が設けられていたのに対して、この賃貸兵舎では裏屋を多数設けることによって土地を最大限に利用しようとする。また、世紀前半では通例四階までだった住居用の建物も五階建て以上が当たり前となる。土地の後方に建てられた部分は、通風や採光の点で正面に面した建物よりも状況が悪いことはいうまでもない。賃貸兵舎の乱立は、一九世紀前半にはファミリーエンホイザーといった特定の建物に限定されていた建物の大型化の傾向が、都市空間の極めて広い範囲に及ぶようになったことを意味する^⑨。

賃貸兵舎が叢生した背景としては、「ホープレヒト案」が個々の土地区画を不必要に広く深く設定したために、土地の後方にも建物が増殖することを許した、という事情が同時代人によって既に認識されている^⑩。

人口増加に伴う住宅需要の拡大のため集合住宅が巨大化するのとは必然的な動きといえ、こうした「ホープレヒト案」に対する否定的な評価には留保が必要とおもわれる。ただ、「ホープレヒト案」がベルリンの住環境に与えた影響としては次の点は指摘しておきたい。確かに、「ホープレヒト案」の範囲では賃貸兵舎が乱立し、都市化に伴う巨大施設が建設される。とはいえ、旧来の都市域は、中心部は官公庁の建物が増加するなどシティとしての性格をもつようになるものの、全体としてはさしあたってそれまでの都市構造を維持している。他方、「ホープレヒト案」の範囲の外には郊外の邸宅地の開発が見られ、帝政期ではそれは市の南西部を中心に進んでいる。したがって、「ホープレヒト案」発令後のベルリンは住環境を考える上で三重構造にあったといえよう^⑪。

その発生以来批判の対象であり続けた賃貸兵舎自体、新たな住環境の成立を象徴的に示していることもここで強調しておきたい。

まず、建物の巨大化によって水の供給や住民の排泄物の処理が従来のやり方では機能しなくなる。それまでは水は庭にある井戸からくんで住居まで運び、また排泄物も室内で簡易便器に出し、それを建物周辺に捨てていたようである。建物が大きくなれば、こうしたやり方は住民、とりわけ上の階の住民には多大な負担をもたらすわけであり、上下水道の普及や水洗トイレの定着の背景には賃貸兵舎の叢生という状況があると想定できよう。実際、ベルリンで賃貸兵舎の建設がはじまったのは一八六〇年代からであるが、上下水道の普及は一八七〇年代以降急速に進む。賃貸兵舎が新たな住習慣を要請し、それが上下水道の普及を促したという推測はあながち外れていないであろう。逆に、上下水道の整備がさらなる賃貸兵舎の建設を促したという側面も想定できよう。他にも、ガスや電気などが普及するのほぼ同じ時期である。賃貸兵舎は、確かにその巨大さと無骨なデザインで多くの批判を引き起こした。しかしながら、建物の内部に目を向けると、賃貸兵舎は都市化に伴って複雑に張り巡らされるようになったこうした「ライフライン」の誕生を象徴的に示すものなのがある^⑭。

次に、一つの土地区画にすむ住民数が増えるに伴い、従来とは異なる形の人間関係が賃貸兵舎の中で形成されていた可能性は十分想定できよう。ベルリンで一九世紀前半に建てられた住居用の建物では、構造物はほぼ道路に面したものであって、建物の後ろのほうの空間は「裏庭」であった。それに対して、賃貸兵舎の中では後ろのほうの空間にも建物が入り込んでいたのでそこに「中庭」が出現する^⑮。ハインリヒ・ツィレの絵で描かれているように、「中庭」が、子供同士の遊び場や井戸端会議の場として住民間のつながりにとって重要な役割を果たすようになったことは十分想定できよう。一方では住民間の軋轢も増えたであろうが、人間関係の場が賃貸兵舎の中に取り込まれたといえる。敷地の後方の空間が、それまでの「裏庭」として認識されていたであろうものから、周囲を住居用の建物で囲まれた「中庭」へと転じたことはこの空間を考える上で重要であろう。

賃貸兵舎叢生後の住宅改革の議論をみていこう。

「ホーブレヒト案」公布後、住宅問題に関心をもつ人たちの間に新たな改革構想が見られるようになる。その特徴を整理すると次の三点である。^⑦

第一に、正確な現実認識をもとに住宅問題を議論する傾向が強まっている。これは、ベルリンでも一八六一年からとられるようになった住宅統計が論者の議論に組み込まれるようになったことに端的に示されている。これと関連して、住宅問題を扱う論者は、それまでの漠然とした不安感に立脚した議論ではなく、社会経済学、都市改革、慈善といった明確な観点に立って議論を展開するようになっていくことも重要である。

第二に、世紀中葉までは既存の都市空間内で問題の解決が図られていたのに対して、郊外に解決の糸口が求められるようになり、都市空間全体の改造を前提とした住宅改革が唱えられるようになる。これと関連して「混合居住」の説得力がドイツ統一前後から揺らぎはじめていくことも指摘しておく。

最後に、こうした議論の変化を背景として、住宅問題に対する調整者としての公権力の役割が求められるようになっていく。とはいえ、これも建築条令による建築物への規制にとどまり、自治体による住宅建設や都市改造などは未だ念頭に置かれていない。住宅改革の主体として期待されるのは、当局よりも非営利的な住宅建設団体であった。

その後帝政期に至る住宅改革運動の動向を見ると、ドイツ統一とほぼ同時に出現した住宅改革構想の方向に沿って事態が進んでいく。

まず、国家や自治体が住宅の供給や建設に積極的に関与するような状況は、帝政期のドイツにはない。ドイツ帝国や帝国最大の邦であるプロイセンにその領域全体に適用される住宅立法がなかったことがそれを象徴的に示している。もちろん、一九世紀末以来、住宅に対する国家の干渉を要求する運動も展開している。これは、一八八五年の社会政策学会の住宅事情調査が住宅問題に何ら解決が見られていないことを明らかにしたのをきっかけとする。しかし、帝政期では様々な利害の錯綜のためプロイセンではようやく一九一八年に住宅立法の成立をみ、しかしながら帝国全体に適用される法律

は帝政の崩壊まで結局存在しなかったのである。また、フランクフルトやウルムなどの例外的な事例をのぞけば、自治体が住宅建設に積極的に関与するという状況も定着しない。たとえばベルリンでは市議会議員の半分は家屋所有者でなければならぬという規定があったため、そうした社会集団の利害に反しかねない政策を市当局が避けたからであると指摘されている。^⑮

とはいえ、公権力が住宅建設に全く無縁だったわけではない。中世以来、建築条令を介して建物の大きさであるとか、道路や隣接する建物との距離といったことに公権力による規制が加えられてきた。一九世紀中葉になると、建築条令による規制は新たな展開をみせる。都市内の地域の性格に応じて規定の違う段階的建築条令が導入されたのである。ベルリンでも、九七年の建築条令によつて、中心部は周辺部より密に建物を建設することが許されるようになる。周辺部の自治体も独自の建築条令を公布しており、ベルリンとその周辺部には建設が認められる建物について六種類の地域が出現したのである。^⑯

次に、ベルリンの郊外、とりわけ南西部から西部にかけてリヒターフェルデ、ヴェストエントといった一戸建ての邸宅用の住宅地が誕生し、帝政期に発展した。郊外が住宅問題の解決に役割を果たすようになったのである。二〇世紀になると都市の外に住居と職場の両方をもうける田園都市の構想もドイツに導入され、ベルリンでも西郊にシュターケンが誕生している。^⑰

最後に、ドイツ統一前後の構想で住宅改革の主体として期待されるようになった建築協同組合などの非営利的住宅建設をとりあげよう。これは、建築協同組合と配当金制限住宅会社の二つに分類できる。前者は、加入する労働者の自助の原則に基づき、加入者が資金を出し合い住宅建設をおこない、後者は株を発行して資本家や慈善家の資金を集め、株に対する配当金に一定の制限を設けるものである。この種の団体は一八九〇年代からドイツ全体で発展をはじめた。これは、八九年の廃疾・養老年金法により低利の資本がこの部門に流入するようになったこと、そして同年の立法により協同組合の

有限責任制が導入されたことがそのきつかけとされている。

ベルリンではこの分野による住宅建設の本格的展開は二〇世紀に入ってからである。一九〇三年までにベルリンにおいてこの種の組織が建てた住居は二五三一にすぎなかった。それが、第一次世界大戦前夜までに一〇の建築協同組合による五五〇〇住居、三つの配当金制限住宅会社による一三五六住居、そして官吏住宅協会による三三〇〇住居と一万住居以上を非営利的住宅建設が供給したことになる。とはいえ、当時のベルリンの住居の総数は六〇万であり、この数字は全体の二％に満たないものにすぎない。第一次世界大戦に至るまでベルリンの住宅は圧倒的に私企業によって供給されたといえる。²³⁾

以上が第一次世界大戦前夜におけるベルリンの住宅改革運動の到達点である。それをタウトがどのように受け入れて展開したのかを章を改めてみていきたい。

- ① ベルリンの歴史については Wolfgang Ribbe(ed.), *Geschichte Berlins. Von der Fytingeschichte bis zur Gegenwart*, München 1987 参照。
- ② 一九世紀ベルリンの人口増加については前掲拙著「六七頁」。
- ③ イギリスの住居については John Burnett, *A Social History of Housing 1815-1985*, London and New York 1985 年参照。
- ④ 19世紀中葉の住居については「史料集」の Johann Friedrich Geist und Klaus Kürvers, *Das Berliner Mietshaus 1740-1832. Eine dokumentarische Geschichte der von Wilhelmschen Familienhäuser vor dem Hamburger Tor, der Proletarisierung des Berliner Nordens und der Stadt im Übergang von der Residenz zur Metropole*, München 1980 参照。また、前掲拙著「九一一―〇三頁」。
- ⑤ 同書「七一一―七九頁」。
- ⑥ この団体については、拙稿「一九世紀中葉ドイツの住宅改革運動」『西洋史学』一六六、一九九二年および前掲拙著第二部第三章参照。
- ⑦ 一九世紀中葉の住宅改革構想については前掲拙稿「住宅改革運動」および前掲拙著第二部第四章参照。
- ⑧ 「ホーレブレイト案」については「Geist und Kürvers, *Das Berliner Mietshaus 1740-1832*, dies., *Das Berliner Mietshaus 1802-1945. Eine dokumentarische Geschichte von Meyer's-Hof in der Ackerstraße 132-133, der Entstehung der Berliner Mietshausquartiere und der Reichshauptstadt zwischen Gründung und Untergang*, München 1984; Julia Lubowitzki, *Der "Hoherechtsplan". Problem der Berliner Stadtentwicklung um die Mitte des 19. Jahrhunderts*, in: Wolfgang Ribbe (ed.), *Berlin-Forschung*, V, Berlin 1990 年」関連史料を参照。また、前掲拙著第二部第一章を参照。
- ⑨ 賃貸兵舎については、同書第一部第一章参照。
- ⑩ Dr. Ernst Bruch, *Berlin's bauliche Zukunft und der Bebauungsplan*, in: *Deutsche Bauzeitung*, Jahrg. IV, No. 9-24, 1870.

- ⑪ 一九六〇年代以降の「ホーブレヒト案」研究は、それまでの断片的論調を修正することを意図している。そうした研究としては、ガイストとキュルファースの二冊の史料集とルボヴィツキの論文の他、Ernst Heinrich unter Mitarbeit von Hannelore Juckel, Der "Hobrechtplan", in: *Jahrbuch für brandenburgische Landgeschichte*, 13, 1962 など。詳細は前掲拙著第三部第一章

- ⑫ ベルリンの三重構造については前掲拙著三四〇—三四三頁。

- ⑬ 当時のヨーロッパの排泄物の処理についてはロジエアンリ・ゲラン『トイレの文化史』（大矢タカヤス訳）筑摩書房（ちくま学芸文庫）、一九九五年。当時のベルリンの一般的住居の図面を見ても、特別な空間としての「トイレ」は設けられていない。前掲拙著七一頁の図面参照。ファミリーエンホイザーでは、中庭の部分にトイレが設けられていたが、便器が四一しかなく、住民数二〇〇〇に対して少なすぎる。また上のほうの階の住民にとっては階段の上り下りの手間がかなりのものになったであろう。各住居内や廊下で用が足されていたようである（同書九七—九八頁）。排泄物が捨てられたためベルリンの道路がどのような状況になっていたかについては、一九世紀前半ベルリンの社会史的史料集 Ruth Kohler und Wolfgang Richter(ed.), *Berliner Leben 1806-1847: Erinnerungen und Berichte*, Berlin 1954, p.124f. 所収の史料参照。

- ⑭ こうした「ライフライン」の発展については、Jochem Boberg,

三 ブルノ・タウトのジードルンク

第一次世界大戦前の段階で既にタウトは前章で見てきた住宅改革運動の動きに関与している。一八八〇年にケーニヒスベルクで生まれ、同地の建築学校に学んだタウトは、一九〇九年フランク・ホフマンとともにベルリンで開業した。タウ

Timan Fichter und Eckhart Gillen(ed.), *Exerzierfeld der Moderne, Industriekultur in Berlin im 19. Jahrhundert*, München 1984, p.88-179.

- ⑮ 一九世紀ベルリンの住居の構造については拙著七一頁参照。

- ⑯ 賃貸兵舎のみならず、帝政期からヴァイマル期にかけてのベルリンの民衆生活を描写したツィンの画集 Heinrich Zille, *Das dicke Zillebuch*, Hannover 2002 など参照。ツィレについては「ツェルリン・オリジナル——ハインリヒ・ツィレ」アンドレア・シュタインガルト『ベルリン〈記憶の場所〉を辿る旅』（谷口健治・南直人・北村昌史・進藤修一・爲雅雅代訳）昭和堂、二〇〇六年。

- ⑰ 前掲拙著第三部第二章参照。

- ⑱ 同書二二頁。

- ⑲ 同書一四頁。

- ⑳ ベルリンにおける建築条例の発展については、Heinz Ehrlich, *Die Berliner Bauordnungen, ihre wichtigsten Bauvorschriften und deren Einfluß auf den Wohnungsbau der Stadt Berlin*, Berlin-Charlottenburg 1933 参照。

- ㉑ Thomas Wolke, *Die Villenkolonie Lichtenfelde. Zur Geschichte eines Berliner Vorortes (1865-1920)*, Berlin 1997.

- ㉒ ミッターケンゴウツチ Karl Keim, *Die Gartensiedlung Staken (1914-1917). Typen, Gruppen, Varianten*, Berlin 1997 を参照。

- ㉓ 前掲拙著二八四—二八六頁。

トは、一方では実験的試みをおこなうことで評判になる。たとえば、一九一三年のライプチヒ国際建築博覧会の「鉄のモニュメント」や一九一四年のドイツ工作連盟ケルン博覧会におけるガラスを大幅に取り入れた、いわゆる「グラスハウス」がある。^① それにとどまらず、いくつかの賃貸住宅の設計に従事している。たとえば、ベルリンにおいてコットブッサーダム九〇番地の賃貸住宅のファサードやノンダムアレーの賃貸住宅をこの時期に設計している。^② そうした中で後年のジードルンクとの関係で重要なのは、ベルリン南東部郊外に設けられた田園都市ファルケンベルクとマクデブルクのジードルンク「レフォルム」であろう。

前者は、ドイツ田園都市協会がベルリンの南東約一五キロメートルにある土地を開発したもので、七五〇〇人に一五〇〇住居を提供することが意図されたが、第一次世界大戦が勃発したためにその一部しか実現しなかった。別の建築家による設計が自治体の承認を得られなかったため設計を引き継いだタウトが、第一期工期の三四住居のうち、テッセノウによる一戸建て一軒を除く全住居の設計を手がけている。^③ たとえば、二戸一の建物ではそれぞれの住居に暖房可能な部屋が三つとできない部屋が一つに加え台所と浴室が設けられている。後者は、これもドイツ田園都市協会のもとタウトが設計に従事したもので、一九一五年には費用を考慮して簡単な構造の四戸一ないしは六戸一の住居が一一八軒建てられた。^④

第一次世界大戦が起ると、ドイツ東部のカトヴィッツの労働者住宅^⑤が実現したほかは、ベルリン郊外のナウエンの都市改造案のように戦争の影響を受けて中止となった計画もあり、タウトの建築家としての活動は縮小を余儀なくされている。そのため、大戦中のタウトは当時の都市社会の状況や戦争という現実を背景に、ユートピアを模索するようになる。それが結実したのが『都市の冠』（一九一九年）や『アルプス建築』（一九一九年）といった一連の著作である。^⑦

『都市の冠』では、広大で単調になりがちな田園都市を中心部の高い建築物によって一つの共同体にまとめ上げることが意図される。^⑧ 第一次世界大戦の惨状を目の当たりにして、アルプス山中をはじめとして地球全体、さらには宇宙に至るまで巨大なモニュメント的建築物を建てることによって人々のエネルギーを建築活動に集中させ、戦争を回避するという

構想を唱えたのが『アルプス建築』である。^⑨

これらのユートピア的著作の内容は、そのまま実現したわけではないものの、その後のタウトの活動に反映している。平地だけのベルリンで山中の建築物を設計することはできないものの、ジードルンクの単調さを回避するような試みはヴァイマル期のタウトの建築活動の特徴づけていたといえる。^⑩飛行塔や隣接するホテルを軸に構想された生駒山上の住宅地も、これらのユートピア的著作に近い発想で構想されていることは改めて説明するまでもないであろう。

タウトの瞑想的期間は大戦の終了とともに終わりを告げる。いくつかの住宅設計をてがけるとともに、一九二一年にマクデブルクの都市建築監察官に任命され、都市計画や大規模公共建築の建設に着手する。しかし、様々な利害の対立から十分な成果を収めることはできなかった。^⑪彼の本領が発揮されるようになるのは、一九二四年にベルリンに戻り、独立した事務所を構えつつ、GEHAGのために大々的な住宅建設に乗り出すようになってからである。

この一九二四年はベルリンの住宅政策にとっても一つの転機といえる。そうした事情を理解するために第一次世界大戦直後の状況に話を戻さなければならない。

まず、第一次世界大戦後、一九一八年のプロイセン住宅立法を手始めに各種の住宅関連立法が整備され、「社会的住宅建設」の制度的基盤が確立していく。従軍していた兵士の帰還に加え、ヴェルサイユ条約によつて失われた領土からの引揚者のためドイツ国内の住宅需要は増大し、極度の住宅不足が発生した。そのため大戦直後には「社会的住宅建設」を通じて住宅供給を安定させることが切実な課題となっていた。さらに公権力による住宅供給への介入が社会全体で受け入れられるようになった背景には、第一次世界大戦が総力戦であったため、国民生活のあらゆる側面に公権力の手が及ぶような状況が不自然なものではなくなっていたことが想定できよう。

次に、ベルリンは一九二〇年に周辺自治体を併合し、大ベルリンを形成する。この結果、ベルリンの面積は従来の十三倍に広がるようになり、人口も大戦前と比べてほぼ倍増し一九二〇年には三百八十七万人となる。一九二〇年代にベルリ

ンの人口は増大し続け、一九二五年には四百七万人、一九三〇年には四百三十三万人になり、この間増大し続ける人口に對する住宅供給は切実な問題であり続けた。^⑧大ベルリンの形成は、こうした量的側面のみならず、住宅問題を解決する場として期待されていた郊外が、一つの政治的單位にまとまったことを意味する。郊外に新たな住宅改革の試みを行いやすい状況になったといえる。

最後に、時期は前後するが、一九三〇年にヴェルナー・ヘーゲマンがその著書『石のベルリン』においてベルリンを「世界最大の賃貸兵舎都市」と批判的にとらえた。その際、彼は元凶の一つとして「ホープレヒト案」を槍玉にあげている。ヴァイマル期にこうした書物が出版されたことは、賃貸兵舎に象徴される一九世紀後半以来のベルリンの都市発展のあり方を批判する風潮が、当時、強く見られたことを示している。他にもヴァルター・ベンヤミンが、ベルリンの賃貸兵舎の歴史を批判的にとらえている。^⑨

こうして、ヴァイマル期ベルリンでは制度的にも領域的にも賃貸兵舎批判という点でも一九世紀以来の住宅改革の伝統を受け継ぎつつ、新たな住宅改革の実践を行うための条件が整いつつあったといえよう。

ところが、ベルリンにおける「社会的住宅建設」の出發は多難であった。戦後すぐに住宅不足を背景に市当局が市営住宅の建設に乗り出すが、それは短期的な試みにとどまり、その事業は別に作られた会社組織が引き継ぐことになる。^⑩

そうした状況に大きな変化をもたらしたのが、一九二四年の家賃税の導入であった。これは、一九二〇年代前半のインフレに伴う家賃の高騰によって家主層が得たと想定された利得を再分配することを目的にしたもので、そこからの税収は建築協同組合、労働組合による組織、自治体による組織、社宅、そして公益的株式会社などの非営利的住宅建設に積極的に投資されることになった。その資本を利用して三〇年までに一三万三千住居が建設される。ベルリン全体では一九二〇年の一一五万住居が一九三三年には一三五万住居となり、その間二〇万住居増えている。^⑪ヴァイマル期に増加した住居の半分以上が非営利的住宅建設によるものであった。それでも流入人口に十分対応できたわけではなく、またこうした住居

に入居できたのが中間層だけであったと指摘されている。その限界は明らかだが、戦前の市当局の住宅政策への消極性と比べると大きな変化といえる^⑮。家賃税に基づく公的助成が導入されたことによってヴァイマル期の住宅改革者は、大戦前の改革者よりもはるかに大規模な住宅建設に乗り出すことが可能となったのである。

ベルリンに移った一九二四年にタウトは部屋や家具の合理的配置を考察した『新しい住居』を公刊しているが、タウトのジードルンクはその実践としての意味をもつ。タウト自身の申告によれば、この時期ベルリンの住宅市場に供給された住居のうち一万二千住居の設計に携わっており、当時の改革住宅の約一割が彼の手になるものである^⑯。彼の活動の組織的バックボーンとなったのが、一九二四年設立のGEHAGである。全国的な組織であるドイツ官吏・職員・労働者のための住宅供給株式会社、略称DEWOGの子会社であり、ベルリンとその周辺の様々な建築協同組合や関連する団体を統合する組織として作られた。GEHAGは、所属する建築協同組合の建てる住宅の設計や施工などを引き受けていた。GEHAGにはタウトをはじめ当時著名な建築家が多数参加し、ナチスによる強制的同一化Gleichschaltungまでに一万一千住居の建築に関与している。

当時のタウトの住宅建設すべてがGEHAG絡みのものではなかったが、一九三一年に至るまで彼はこの組織の中心の建築家として活躍していく。この間、彼が設計し、実際に建設に至った集合住宅やジードルンクはベルリン近辺で二〇ヶ所以上に及ぶ。土地の広さ、価格、立地など与えられた条件のもととも効率よく快適な住居を目指して設計されたそれぞれの建物については単純な類型化を許さないものがある。

タウトのジードルンク全体に通じる新たな試みとしては、建物の色彩についての実験をあげることができよう。建築家としての活動の初期段階から色彩への関心は強くみられるが、ベルリンのジードルンクにおいても建物には周辺の環境も考慮した着色がなされている^⑰。彼が色彩にこだわる背景には、それまでの建築物が石、煉瓦、コンクリートなどの素材をむき出しにしたままであり、結果として町並みが黒、灰色、茶色を中心とした単調なものとなっていた事情があったよう

に思われる。とくに巨大な構造物であつた賃貸兵舎が跳梁跋扈したベルリンでは、そうした問題は他の都市よりも切実であつたであろう。

色彩にとどまらず、デザイン上の様々な試みがなされていることは、一九世紀においては私企業によるものであると改革組織によるものであるとを問わず、都市内の住宅の構造が、単純な箱型の建物に装飾をくわえただけのものが多かったことを考えると都市建築を刷新する大胆な試みと位置付けることも可能である。

ここでは、「ホープレヒト案」をきっかけに生じたベルリンの三重構造をふまえてタウトの建てた住宅の所在地に着目して見てみたい。^{②①} その多くは、「ホープレヒト案」が策定された地域よりも外にあり、残りも策定された地域の外側のはしに建てられている。タウトが設計した建物の形態を建てられた地域に留意してみると、「ホープレヒト案」の外の地域には一戸建てを中核としたジードルンクが設けられ、中の地域には四階建てや五階建ての集合住宅が建てられている（図二）。

「ホープレヒト案」の地域外から見ると、比較的小規模のものも多い。だが、当時において、また現在においても諸方に大きな影響を与えているのは一戸建てと集合住宅を組みあわせて設計された大規模なジードルンクであろう。具体例としては、ベルリン西北部ライニケンドルフの五四一住居からなる「フライエ・シヨレ」協同組合によるジードルンク（一九二五—一九三二年）^{②②}、南部のブリッツにある一九六三住居の馬蹄形ジードルンク（一九二五—一九三二年）^{②③}、南西部のオンケル・トムス・ヒュッテ（一九二六—一九三二年）、そしてブリッツの建築協同組合イデアールの三三三三住居からなるジードルンク（一九二八—一九三〇年）^{②④}をあげることができよう。

このうちタウトが都市建築監督官マルティーン・ヴァーグナーと共同で設計した馬蹄形ジードルンクは、中心部に大きな庭を囲んで馬の蹄の形をした三階建ての集合住宅が特徴的といえる。その馬蹄形の構造物の周辺に一戸建てをつなげた形の建物 Reihenhäuser が並んでいる。一九六三住居のうち一五五六が集合住宅である。集合住宅にはいくつかのタイプ

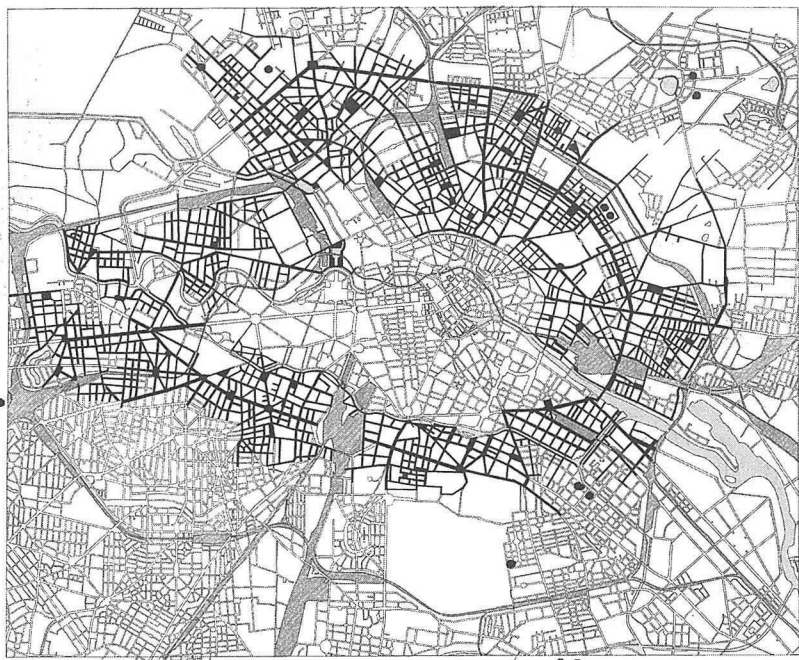


図2 タウトのジードルンクの分布 (●)

黒線がホーブレイト案が策定された地域の道路網

Johann Friedrich Geist und Klaus Kurvers, *Das Berliner Mietshaus 1862-1945. Eine dokumentarische Geschichte von »Meyer's-Hof« in der Ackerstraße 132-133, der Entstehung der Berliner Mietshausquartiere und der Reichshauptstadt zwischen Gründung und Untergang*, München 1984, p.500の地図をもとに筆者作成。

が存在するようだが、代表的なものは暖房可能な部屋が二つとできない部屋が二つに台所と浴室の設けられたものである。一戸建ては四〇七あるが、二階建てで、一階に居間、食堂、台所、二階に寝室が二つと浴室が設けられたタイプが標準的であるようである。集合住宅も一戸建ても比較的小規模な住居であり、入居することが期待された階層は広範な民衆層であったといえる。馬蹄形の建物で囲まれた庭には十分な緑地のスペースが確保され、周辺部も十分な緑があり、近代的な住居と自然との融合がはかられている。

自然との融合ということでは、白樺と松の林の中に立てられた観のあるオンケル・トムス・ヒュッテも重要であろう。「森のジードルンク」とも呼ばれたこのジードルンクには、七期にわ

たる工期を経て集合住宅に一一〇五住居、そして一戸建てに八一〇住居が設けられた。このジードルンクと馬蹄形ジードルンクの間で部屋数や施設の点で住居に求められるものは両方ともほぼ同じである。大戦前の田園都市フアルケンベルクと同様に、とくに両者ともそれまでそれほど普及していなかった浴室が必ず設けられていることは、かなり高い水準の住居を入居する者に提供しようとしたものと理解できる。

以上、「ホープレヒト案」の地域の外に設けられたジードルンクは、ベルリン周辺部に残る広大な土地と自然を取り込んだ形で大規模な住宅地を作り出そうとしたのだといえる。

他方、帝政期以来の賃貸兵舎が根強く残る「ホープレヒト案」の地域に建てられた建物は、土地価格や住宅需要の関連から基本的に集合住宅である。一九二五年の建築条令によって裏屋などは禁止され、賃貸兵舎のそれ以上の増殖が不可能となっていた^⑤。そのため、賃貸兵舎とは違ったタイプの集合住宅が試みられることになったといえる。その点で象徴的であったのは、北部のプレントラウアーベルクに建てられた「カール・レギエン」であろう。一九二八年から三〇年に建てられたこの集合住宅からなるジードルンクは、賃貸兵舎の密集した地域に建てられている。当時の建築条令ではこうした地域では五階建てまでに制限されていたが、一方人口密集地域であり、住宅需要も大きかったため効率よく設計することが求められていたのである。その結果、四角のブロックの三方のみに建物を建てる様式がとられた。この工夫により中庭部分が開放的な雰囲気となり、また開口部の並んだ通りはきわめて広々とした光景が生み出されるようになる。三期を予定していた工期のうち二期だけが完了し、一一四八住居が設けられた。そのうち、暖房可能な部屋が二つまでの住居が九四三住居と圧倒的多数であり、比較的小規模の住居を多数設けその地域の住宅需要に対応しようとしたものであろう^⑥。「カール・レギエン」でも浴室が設けられている。

以上、タウトのジードルンクは、家賃税の導入や建築条令の改訂という新たな条件のもと、「ホープレヒト案」以来のベルリン市内の地域特性に応じて賃貸兵舎に代わる住宅様式の試みがなされたものと位置づけることができる。その際に、

浴室をもうけていることが示すように、当時としてはかなりの水準の住居を入居者に提供しようとしている。彼がベルリンで建設したジードルンクのうち、とくに郊外の大ジードルンクは、ジーマンスシュタットなど他の建築家による大ジードルンクとともに、郊外に住宅問題の解決の手がかりを求める帝政期以来の発想の系譜に属しているのは明らかといえる。他方、基本的に市民層に限定されていた帝政期の郊外住宅地とちがい、ヴァイマル期のジードルンクは、広範な社会層を念頭につくられており、郊外の住宅を享受できる社会層は確実に広がったのである。

しかしながら、こうした試みはあくまでも市の周辺部における住宅増設にとどまり、根強い批判があつたとはいえ、当時は賃貸兵舎を大々的に解体したり、旧来の市街地を再編成したりすることにまで住宅改革者の議論は進まない。したがって、タウトや同時代の建築家や住宅改革者は、伝統的な市の中心、賃貸兵舎の乱立する地域、そして郊外の自然の中の住宅地という帝政期以来のベルリンの構造の枠の中で住環境の改善という問題に取り組んでいたと評価できよう。新たな条件のもと新たな住宅改革の試みであつたものの、その発想の根底は一九世紀以来形成されてきたベルリン都市社会の構造に規定されていたといえる。

- ① Kristina Hartmann, Ohne einen Glaspalast ist das Leben eine Last (Paul Scheerbart), in: Nerdinger et al. (eds.), *op.cit.*
- ② Manfred Speidel, Das Frühwerk, in: Nerdinger et al. (eds.), *op.cit.*
- ③ Nerdinger et al. (eds.), *op.cit.*, p.330-332.
- ④ *Ibid.*, p.333-335.
- ⑤ *Ibid.*, p.339-340.
- ⑥ *Ibid.*, p.338-339.
- ⑦ Whyte, *op.cit.*
- ⑧ Bruno Taut, *Die Stadtkrone*, Jena 1919, フタリウム美術館編前掲書
八二一八七頁参照。
- ⑨ Bruno Taut, *Alpine Architektur : eine Utopie*, München 2004.
- ⑩ Hartmann, Bruno Taut, der Architekt und Planer, in: Nerdinger et al. (eds.), *op.cit.*邦訳としては、篠田英雄訳(育成社弘道閣)一九四四年・ブルーノ・タウト全集第六巻)と土肥美夫訳(土肥前掲書巻末)がある。
- ⑪ マクデブルク時代のタウトにまつは Olaf Gisbertz, *Bruno Taut und Johannes Götteritz in Magdeburg : Architektur und Städtebau in der Weimarer Republik*, Berlin 2000; Regina Prinz, Bruno Taut als Stadtbaurat in Magdeburg 1921 bis 1923, in: Nerdinger et al. (eds.), *op.cit.*
- ⑫ Herbert Schwenk, *Lexikon der Berliner Stadtentwicklung*, Berlin 2002, p.253.

- ¹³ Werner Hegemann, *Das steinerne Berlin. Geschichte der größten Mietskasernenstadt der Welt*, Berlin 1930. ヴァルター・ベンヤミン「賃貸集合住宅」同『子供のための文化史』晶文社、一九八八年（原書は一九八五年）。もともとは一九二九年から三二年にかけて行われたラジオの連続講演の原稿を集めたものである。翻訳では、「賃貸集合住宅」と訳されているこの講演のタイトルの原語は、筆者が「賃貸兵舎」と訳してこそ Mietskasernen である。

- ¹⁴ *Geschichte der gemeinnützigen Wohnungswirtschaft in Berlin*, p.107f.
¹⁵ *Lexikon*, p.260.

- ¹⁶ Ribbecked., *op.cit.*, p.863-867.

- ¹⁷ 「ブルーノ・タウト年譜
の履歴書より」セゾン美術館編前掲書、三九頁。

- ¹⁸ 一九〇六年に行われた、ルートヴィヒスブルク近郊のウンターリンクシーゲンの福音教会の改装の際にもさまざまな彩色の試みを行おうとしている。セゾン美術館編前掲書、八八―九二頁。

- ¹⁹ 彼の最晩年の著作『建築芸術論』（岩波書店、一九四八年）において、ヨーロッパの知識人の一般的風潮に反して、アテナイのパルテノンがもともとは彩色されていたことを当時のギリシア人の感覚から必

然のものと評価していることは、彼の色彩へのこだわりを考える際に重要である（同書九〇頁）。また、パルテノンが彩色されていたこと、およびそれを取り去って白亜の構造物にしたことについては、栗原麻子「パルテノン 歴史のなかの存在」奈良大学文学部世界遺産コース編『世界遺産と都市』風媒社、二〇〇一年参照。

- ²⁰ タウトのジードルンクの所在地については Nerding et al. (eds.), *op.cit.*, p.310-395 のタウトによる建築のリスト参照。また Winfried Brenne, *Bruno Taut. Meister des farbigen Bauens*, Berlin 2008 も参照。タウトによるジードルンクの代表的なものは、セゾン美術館編前掲書二〇九―二四〇頁およびワタリム美術館編前掲書三二―四七頁でも紹介されている。

- ²¹ Nerding et al. (eds.), *op.cit.*, p.357.

- ²² *Ibid.*, p.363-365.

- ²³ *Ibid.*, p.368-370.

- ²⁴ *Ibid.*, p.377-378.

- ²⁵ Ehrlich, *op.cit.*, p.39-46.

- ²⁶ Nerding et al. (eds.), *op.cit.*, p.376-377.

おわりに

本稿は、タウトの建築活動をひとまず一九世紀以来のベルリン都市社会の変化や住宅改革運動の流れのなかに位置づけることを目的とした。そのため、一九世紀の住宅改革と、ヴァイマル期のタウトらの活動の相違であるとか、ヴァイマル期におけるベルリン社会の変化のなかでのジードルンクの位置づけについては十分議論を展開することはできなかった。これらの点については今後の課題としたい。

とはいえ、本稿は、タウトの活動が一九世紀以来の住宅改革運動の伝統や都市社会の構造の影響を受け、またそうしたものにその構想の根底の部分で規定されていたことを明らかにしたことでその目的は十分に達成したといえる。従来の研究は二つの時期の間の関係を十分検討してこなかったが、ヴァイマル期の住宅政策や改革を検討する際にも、一九世紀以来の住宅改革運動との連続性と断絶を考慮して研究する必要があるのである。こうしたタウトの建築家としての活動やその背景にある思想の変遷を史料に立脚して具体的に考察することも今後の課題としたい。

二点ほど展望をのべて本稿を締めくくりたい。

まず、ブルーノ・タウト自身は、一九三二年の短期間のモスクワ滞在^①の後、一九三三年にナチス政権が成立すると、それまでの彼の社会主義よりの活動のため迫害を受けることを恐れ亡命し、一九三六年まで日本に滞在する。その間、冒頭でのべたように、生駒山上の住宅地を設計するが、実現せず、また他にもほとんど建築家としての活動ができなかった。

三六年には、トルコに亡命していたジードルンク設計の僚友ヴァーグナーの尽力で、イスタンブール工芸大学と文部省建築主任の職を得る。トルコでの活動はもっぱら学校や官公庁の設計であり、ジードルンク設計には手を染めていない。一九三八年、彼はトルコの地で五八歳の生涯を閉じることになる。結局、タウトのジードルンクへの関与は一九二〇年代に実質的におわりを告げたわけである。そして、ナチ政権成立直後に亡命、異国で客死したタウトは、第二次世界大戦後のドイツの建築界では大きな関心をもたれなかった。戦後のヨーロッパの社会経済的状况や社会的風潮に適合した建築を設計することのなかった彼は時代遅れの存在とみなされたのである。

次に、ベルリンの置かれた状況もタウト同様大きく変わってしまう。一九三七年、ヒトラーは建築家シュペーアに命じて「古代エジプト、バビロニア、ローマに匹敵する」都市にすべくベルリンの大改造に乗り出す。軸となる南北と東西に走る大道路の建設が試みられている。既存の道路を拡充するだけの東西の軸に対して、南北の軸は中心部の一五万人収容の大ホールから凱旋門を経て南駅に至る幅一五六メートルの大道路を、既存の建築物や鉄道線路を撤去して設けることが

計画されている。これは、今までのべてきたベルリンの三重構造にちょうどくさびを打ち込むことになり、必然的に都市構造全体の再編成をもたらす可能性を内包するものであった。^③

一九三九年、第二次世界大戦が始まると部分的にはじまっていた工事は中断を余儀なくされる。代わりにベルリンに大きな変化をもたらしたのは、連合国による爆撃や市街戦による被害であり、冷戦のまった中でつくられたベルリンの壁^⑤であるのはいうまでもないであろう。前者では住宅の三分の一が破壊され、後者ではベルリンがコンクリート製の無骨な壁によって分断されてしまう。第二次世界大戦後もタウトのジードルンクは、住宅として利用され続けたのだが、分断という極度の緊張状態のなかでは自然との共生や色彩の実験といった特性はその意味合いを十分に認識されづらい状況にあったといえる。

彼に対する関心がドイツ本国において高まったのは一九八〇年代に入ってからである。環境問題への関心が高まるとともに、自然との融合をはかった彼の建築が再び注目を浴びたという背景を想定できよう。一九八〇年代にはタウトの設計したジードルンクの修復や色彩の再現が試みられている。^⑥また、再統一が、冷戦によって分断された悲劇の街というイメージの呪縛からベルリンを解放したことも、戦間期のベルリンで活躍したタウトへの関心の背景となったことも想像に難くない。

こうして、ユネスコの世界遺産にも登録されるようになったタウトらの建設したヴァイマル期の改革住宅は、その歴史的意義の再評価が可能な状況になったのである。

① ソヴィエトにおけるタウトの活動についてはセゾン美術館編前掲書、二五二―二五八頁。

② トルコにおけるタウトについては同書三二七―三二七頁。

③ Brian Ladd, *The ghosts of Berlin. Confronting German history in the urban landscape*, University of Chicago Press 1997, p.134-131.

④ 第二次世界大戦におけるベルリンの被害については、Johann Friedrich Geist und Klaus Kivers, *Das Berliner Mietshaus 1945-1989. Eine dokumentarische Geschichte der Ausstellung „Berlin plant/Erster Bericht“ 1946 und der Versuch, auf den Trümmern der Hauptstadt des Großdeutschen Reiches ein NEUES BERLIN zu bauen, aus dem dann*

zwei geworden sind, München 1989 参照。

- ⑤ ヘルリンの壁について Ladd, *op.cit.*, p.7-39 参照。分断された時代のヘルリンを象徴する有名な場所については、ア・シユタインガルト前掲書の「社会主義統一党のヘルリン」および

「分断されたヘルリン——壁に囲まれた西側」を参照。

- ⑥ Wilfried Brenne, Wohnbauten von Bruno Taut. Erhaltung und Wiederherstellung farbiger Architektur, in: Nerdinger et al. (eds.), *op.cit.*

(大阪市立大学大学院文学研究科准教授)

Bruno Taut und die Berliner Wohnumwelt. Mit Schwerpunkt
auf dem Siedlungsbau in der zweiten Hälfte der
zwanziger Jahre des 20. Jahrhunderts

von

KITAMURA Masafumi

Der deutsche Architekt Bruno Taut nahm im Berlin der zweiten Hälfte der zwanziger Jahre des 20. Jahrhunderts aktiv am Bau von Wohnungen für breitere soziale Schichten teil. Mit öffentlicher Förderung führten damals viele gemeinnützige Baugesellschaften in großem Maßstab Wohnungsbauvorhaben durch. In diesem Sektor wurden mehr als 130,000 Wohnungen gebaut, und zwölftausend davon wurden von Bruno Taut geplant. In letzter Zeit hat die baugeschichtliche Forschung über Bruno Taut sowohl in Deutschland als auch in Japan zugenommen. Dabei steht jedoch der Standpunkt, Bruno Taut mit dem Wandel der Berliner Stadtgesellschaft in Verbindung zu bringen, nicht im Vordergrund. Deshalb versuche ich in diesem Artikel, die Siedlungen von Bruno Taut in den Kontext der Entwicklung der Wohnumwelt in Berlin seit der ersten Hälfte des 19. Jahrhunderts zu stellen. Dafür gebe ich zuerst einen Überblick über die Wohnumwelt und die Wohnungsreformbewegung in Berlin im 19. Jahrhundert und richte dabei meine Aufmerksamkeit auf die Struktur der Berliner Gesellschaft, die infolge des 'Hobrechtplans' (1862) entstand. In der Zeit des Deutschen Reiches entstand eine dreifache Stadtstruktur in Berlin: 1. das Stadtzentrum, wo das traditionelle Stadtbild weiter bestand; 2. das dieses Stadtzentrum umrahmende Gebiet, dessen Straßennetz durch den 'Hobrechtplan' geplant wurde, und wo damals viele Mietskasernen und große Gebäude, wie Bahnhöfe, Viehmärkte usw., gebaut wurden; 3. die außerhalb dieses Gebiets liegenden Vororte im Grünen, wo, vor allem im Südwesten, die Villenkolonien wie Lichterfelde, Wannsee oder Westend entstanden. Dann schätze ich den Zusammenhang zwischen der dreifachen Struktur Berlins und den von Bruno Taut geplanten Siedlungen ein: 1. gab es im Stadtzentrum keine Siedlungen; 2. plante er im Gebiet des 'Hobrechtplans' Siedlungen, die ausschließlich aus Geschosswohnungen bestanden; und 3. waren viele Siedlungen in den Vororten ein Gemisch aus Einfamilienhäusern und Geschosswohnungen. Daraus lässt sich schließen, dass das Werk von Bruno Taut unter dem Einfluss

der dreifachen Stadtstruktur Berlins stand. Abschließend versuche ich das Verhältnis zwischen der Bewertung Bruno Tauts in der Geschichtswissenschaft und der Architektur und dem Wandel der Berliner Gesellschaft nach dem Zweiten Weltkrieg zu analysieren, um so die Ergebnisse dieses Artikels in langer Perspektive bis hinein in die Gegenwart zu betrachten.

Emergence of the Discourse of Global Environmental Crisis in the British Empire between the Wars

by

MIZUNO Shoko

This study examines the way in which the discourse of global environmental crisis emerged and spread in the British Empire between the Wars, and also identifies the nature of this discourse. In the field of environmental history, the processes by which and how far environments have changed on a global basis has been a main concern. Most historians agree that the empire had a major impact on such environmental changes. Meanwhile, the questions how and why anxiety about the global environment were widespread have not yet been answered. In this article, I mainly deal with the arguments among colonial scientists of environmental degradation, such as soil erosion and desiccation, not only within the empire but also in the rest of the world.

In the first part of this study, I observe the progression of desiccation theory. I use the term 'desiccation theory' to incorporate a large body of ideas centred on the connections between deforestation on the one hand, and increased erosion, flooding and overall aridity of land and climate on the other. This theory had been advocated mostly by the members of the Indian Forest Service since the late nineteenth century. They recognized desiccation as a phenomenon particular to tropical and subtropical conditions, but they began to understand that desiccation could happen anywhere in the world after the First World War.

There follows an analysis of the discussion about 'the encroachment of the Sahara', which had effects on the discourse of global environmental crisis. Through this discussion, I explore how desiccation theory was interpreted by ecologists, geographers, agriculturalists, soil scientists and so on. At the same time, I seek to indicate that colonial scientists came to share ideas concerning the relationship be-